

ワークショップのご案内

一般社団法人日本箱庭療法学会第 31 回大会を上智大学（東京都千代田区）にて開催いたします。今大会は、12 名の先生方にワークショップ講師をお引き受けいただくことができました。

ワークショップの形式は、講師に一任しています。コースによって、テーマに即した参加者からの事例提供を募集しています。詳細は各コース（A～L）の案内をご覧ください。

みなさまの積極的なご参加を心よりお待ちしております。

1. ワークショップ概要

日 時： 2017 年 10 月 7 日（土） 9:30～12:00（受付開始 9:00）
会 場： 上智大学 四谷キャンパス （〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1）
講 師： （50 音順・敬称略）

A	伊藤 良子	（京都大学名誉教授）
B	岩宮 恵子	（島根大学）
C	岡田 康伸	（京都大学名誉教授）
D	河合 俊雄	（京都大学こころの未来研究センター）
E	川崎 克哲	（学習院大学）
F	川戸 圓	（川戸分析プラクシス）
G	桑原 知子	（京都大学大学院教育学研究科）
H	田中 康裕	（京都大学大学院教育学研究科）
I	豊田 園子	（豊田分析プラクシス）
J	弘中 正美	（山王教育研究所）
K	前川 美行	（東洋英和女学院大学）
L	リース 滝 幸子	（C.G.Jung Institute of Los Angeles）

受 講 費：

	予約参加	当日参加
会 員	6,000 円	7,000 円
非会員	8,000 円	9,000 円

**当日参加料金にて引き続き
受け付けております。**

* 当日参加は、定員に余裕のある場合に限り可能です。

* 非会員で参加を希望される方は、日本箱庭療法学会第 31 回大会準備委員会までお問い合わせください。

受 講 資 格： 一般社団法人日本箱庭療法学会正会員。もしくは臨床心理士の有資格者、臨床心理学を学んでいる大学院生、臨床心理学およびその関連領域で実践的な仕事に従事されている方で、心理臨床事例に関する守秘義務を遵守できる方。

2. ワークショップ・コースのご案内

A 分かりにくい箱庭表現 ー感覚・直観機能の観点を踏まえた検討ー

講 師: 伊藤 良子 (京都大学名誉教授)

内 容: 箱庭表現においては、人間の様々なあり方を視覚的に理解することが可能とされる。神経症圏の箱庭は見るものの心に強く訴えるが、他方、物語性がない・無機的・同じ表現が繰り返し続く等の表現においては、見るものの「感情」を喚起しにくく、論理的な「思考」で理解することも困難な場合がある。これまでのワークショップや研修会では、こうしたものを「分かりにくい箱庭表現」として検討してきたが、それらは、その分かりにくさにも拘わらず、否、それゆえにこそ、身体的な基盤にもつながる深い次元の重要な表現であると考えられた。今回は、ユングのいう感情や思考という合理機能では接近が困難な「分かりにくい」箱庭表現を、「感覚機能」「直観機能」という非合理的な心的機能の観点を踏まえて検討したい。

事例提供者: 松波美里氏

B 箱庭表現と家族の再生 ー子どもの箱庭が促進する家族の変容について考えるー

講 師: 岩宮 恵子 (島根大学)

内 容: 子どもの問題行動の裏には、家族内に暴力が存在していたり、親の精神疾患が背景にあったりすることも少なくない。家族というもっとも守られるべき場所での守りが欠けていたとき、子どもは否応なく不適切な行動に駆り立てられる。問題行動という形で子どもが表現した家族の危機を、どのように私たちは受け止めることができるだろうか。家庭でのさまざまな困難ゆえに見相に保護された子どもが、箱庭表現を通して自分のなかにある力を発見し、変容していくプロセスを検討しながら、その子どもの変容の力が家族に及ぼす影響についても検討したい。そして、そのような変容の「場」として児童相談所が果たす役割についても考えたい。

事例提供者: 茂 晃久氏

C 事例を通して箱庭療法の基礎を学ぶ

講 師: 岡田 康伸 (京都大学名誉教授)

内 容: 今回のワークショップも事例に基づきながら、箱庭療法の基礎を学ぶことをめざしたい。箱庭療法は3つの用具(砂、箱、玩具)に特徴がある。他の芸術療法と同じように、箱庭の作品が第3の通路として存在する。すなわち、制作者と見守り手との言語的・非言語的交流以外に制作者が作品を作り、見守り手がその作品を鑑賞し、反応する、その反応を制作者が感じる通路がある。これは、心理療法の心理治療者が少し遅れて反応をすることに通じる。心理療法では、クライアントが主体であり、セラピストはそれに少し遅れながら付いていくことが大切とされることに正に当てはまるからである。このような心理療法にとっても基本的なことが箱庭療法では自然にしやすいことなどを今回は学べればと思う。

事例募集: 受講者の中から事例提供者を募集します。

D 身体疾患と箱庭療法・イメージ

講 師: 河合 俊雄 (京都大学こころの未来研究センター)

内 容: 近年、狭義の心身症だけでなく、様々な身体疾患のこころのケアに心理療法が関わるが増えている。心身症について alexithymia ということが言われるように、心身症あるいは身体疾患はイメージから遠く、イメージでのアプローチがむずかしいという見方がある。しかしイメージで関わることによって、身体疾患に対して全く異なる次元でのアプローチが可能になることがある。特に箱庭療法は、実際に砂にふれること、テキスト性を超えた側面を持っている

ことによって、身体疾患に効果的なことも多い。身体疾患にイメージに関わることの意義、また様々なイメージ媒体の身体疾患との相性、それに特徴を概説し、実際の事例に基づいて検討したい。

事例提供者：坂井朋子氏

E イメージにおける境界と色をめぐる

講 師：川崎 克哲（学習院大学）

内 容：箱庭や風景構成法、あるいは夢において、そこに現れる「境界」は非常に重要な指標となると思われる。それらにおいて、心的世界が表象していると考えれば、「境界」とは箱庭の作り手、風景構成法の描き手、夢をみる人にとって自身のサイコロジカルな内界において、ある部分と残りの部分との間にある種の「解離」がそこにみられることを示しているからである。この「解離」でもっともオーソドックスなものは神経症にみられる意識と無意識の「解離」である。この場合、心理療法の作業は境界によって分断している両領域を橋渡す（結合する）ことが中心的となるだろう。あるいは、心的世界のある部分が「くっつき」すぎており、適切な分化がなされないことが問題となる場合もある（たとえば、統合失調症や発達障害）。この場合には、境界線が引かれることで、ある領域がその他の領域から分離することが心理療法の重要な作業となるだろう。今回のワークショップでは、もっとも基本的な「境界」にまつわる病理として強迫神経症をとりあげ、この病理において境界で分離・排除しているものの本質を「色」という視点から考えていきたい。この基本線を押さえることで、種々の病理における「境界」の現れ方（たとえば、箱庭における柵、風景構成法における川や連山がどのように描かれるかなど）、「色」の現れ方（たとえば、風景構成法である項目に彩色されない場合や夢においてあるものが白色化することなど）の意味をとらえることができるようになると思われる。

事例提供者：村田知久氏

F 夢を通じての〈死者(霊)〉との対話：カルト宗教からの脱却の道

講 師：川戸 圓（川戸分析プラクシス）

内 容：夢とは不思議な力を持つものである。例えば、世阿弥が創出した〈複式夢幻能〉は、ワキの見る夢が1つのドラマに仕立て上げられ、それがシテによって能舞台の上で演じられる、という構造になっている。つまり夢そのものがドラマ化され演じられるのである。そして〈複式夢幻能〉におけるドラマの主人公は現実に生きている人ではなくて、死者の霊であり、超越的存在者である。死者および超越的存在者は、畢竟、時空を越えた存在者である。つまり、夢という装置を用いることで、時空を越えた存在者と相対することが可能になるのである。観客はと言えば、ドラマに没入し、時空を越えた存在者とまみえることで、狭く頑なになった心を和らげ、魂が鎮められるという体験をすることになる。このような力をも夢は持っているのである。このワークショップでは、30代からカルト宗教にはまり、60代になってうつ病と診断された女性の夢を報告して頂く。彼女がまさに夢のドラマを生き、そのドラマに導かれて、カルト宗教という狭く頑なな世界への囚われから、「夢の中で宇宙の夢を見」て、「包まれているような安心感」へと開けて行き、カルト宗教から脱却していく道をたどってみることにしたい。夢を通じて心の変容をたどりながら、心と宗教の問題にほんの少しだけ触れてみたいとも考えている。

事例提供者：杉山由利子氏

G 心理療法における「ほんとう」と「うそ」一語り、箱庭、夢における「ほんとう」と「うそ」

講 師：桑原 知子（京都大学大学院教育学研究科）

内 容：心理療法においては、妄想に代表されるように、「事実ではないだろう」という語りがある。「ほ

んとう」はどのようなだろう、と語りをめぐって答えのない問いを繰り返すこともあるだろう（たとえば、「ほんとうに」いじめを受けているのか、事実ではないことを訴えているのか、あるいは、「ほんとうに」耳が聞こえないのか、大げさに訴えているのか、など）。一方で、箱庭における表現や夢のなかの「語り」は、「ほんとう」でもなければ、「うそ」でもない。「ほんとう」と「うそ」という切り口から、夢や箱庭表現、また、心理療法における語りを考えてみたい。そして、「ほんとう」と「うそ」の間（はざま）にあるこの世界、そして、そのところへのアプローチについて、いっしょに考えてみたい。事例を募集します。どんな場所で行われたものでも、どんな事例でもかまいません。

事例募集：受講者の中から事例提供者を募集します。

H 発達障害の心理療法における身体とイメージ

講師：田中 康裕（京都大学大学院教育学研究科）

内容：発達障害圏のクライアントが、時に特異とも思える身体感覚をもっていたり、時に奇妙とも思える身体症状を呈したりすることは臨床的にはよく知られている。そこには、彼らの「自己感」とその基盤となる身体スキーマの非定型性があるのだろう。このような非定型性は、彼らが心理療法過程において、報告される夢、制作される箱庭や描画等のイメージ表現についても同様に、身体感覚やイメージ表現のあり方に着目することは、発達障害の事例の見立てにおいてだけでなく、心理療法の進展を見定めるメルクマールとしてもたいへん重要である。このワークショップでは、長期にわたる経過のなかで自らの身体それ自体やイメージを媒介として「生」（「なま」「いきる」）の感覚に開かれていった心理療法の事例を素材にして、発達障害のクライアントの身体感覚や身体性、さらにはイメージ表現の特徴について考察を深めたい。

事例提供者：西牧万佐子氏

I 心理療法での言葉と言葉にならないもの

講師：豊田 園子（豊田分析プラクシス）

内容：ひとは自分を表現し、他者との意思疎通をはかるときに、言葉に頼りがちである。それは心理臨床の場も例外とはいえないが、それでもそこでは言葉にならないものがさまざまに動いていることを、多くの臨床家が感じているだろう。それを掬い上げるために、夢や箱庭、描画などイメージを用いることが役に立つことも多い。イメージを用いない場合でも、セラピストは言葉だけに捕われず、言葉にならないものを感じていることが必要になる。言葉にならないものをそのまま受け取ることも大事だが、またそこから新たな「ことば」が生まれることもあるだろう。道具としての言葉ではなく、こころの中心に通じるような「ことば」である。心理臨床での言葉にならないものについて考えてみたい。事例を募集します。夢、箱庭、描画などを用いた事例でも良いですし、そうでなくても、言葉にならないものを考えてみたいということなら、どんな事例でも結構です。

事例募集：受講者の中から事例提供者を募集します。

J 子どもと箱庭

講師：弘中 正美（山王教育研究所）

内容：子どもに箱庭療法を行うときには、「箱庭療法」とか「箱庭制作」と言った表現よりも、「箱庭遊び」と言う方が適切である。子どもの場合、箱庭の世界を作ることそのものが遊びとなっていたり、箱庭の中で遊びそのものが展開したりするからである。そして、結果としてそこに表現されたものを象徴的に理解するよりも、子どもが遊びながら何を体験していたのかについて考えるほうが治療の展開に役立つことが多い。本ワークショップでは、子どもの遊戯療法の中

で箱庭遊びが行われるときに、それをどのように捉えていけばよいのか、このテーマを子どもの事例に基づいて「遊びの体験」の視点から検討することにしたい。

事例提供者：新井彩加氏

K イメージ表現による直観的交流が生み出すもの

講師：前川 美行（東洋英和女学院大学）

内容：イメージ表現は、複雑な状況を直観的に表すことを可能にする。たとえば箱庭療法は、位置や意味に縛られずに自由に置いて、羅列的で平面的な世界を表すことや、豊かな三次元空間を立ち上がらせることを可能にする。また夢は、まとまらない内的体験を意味がわからないまま表現することができる。そのようにイメージ表現は、意味による交流ではなく、直観的交流を促すのである。言葉で表しがたい体験を抱えた思春期や発達障害のクライアントが、イメージを媒介として体験を表現できるのはそのためである。しかしながら、中心がなくまとまらないイメージ表現（夢・箱庭・描画）も、繰り返すことで秩序が生まれ、意味が見えてくることがある。そこで、イメージ表現による直観的交流と心理的変容の関連を自験例と参加者の事例から考えてみたい。事例を募集します。

事例募集：受講者の中から事例提供者を募集します。

L 治療者の情緒的な経験の瞬間を捉え、関係性をイメージする

講師：リース 滝 幸子（C.G.Jung Institute of Los Angeles）

内容：【テーマ1】治療者の情緒的な経験の瞬間を捉え、それが治療のプロセス全体にどう影響するかに注目したい。

【テーマ2】箱庭療法の関係性をイメージする。

【例1】：初回のセッションが終わる時点で、青年期のクライアントで鬱状態を訴える彼は砂箱に近寄り指先でシャツ、シャツと砂に触ると、急にイメージが湧き上がり、それを語った。

さて、どんなイメージが浮かんだのか想像してみてください。

【例2】：初回の箱庭のセッション後、母親は9歳になる娘、クライアントに「箱庭はどうだったの？」と尋ねました。彼女はそれをイメージで答えました。彼女の答えを想像できますか？母親は父親をどう説得するか、いい案がなかった。ところが娘の話聞いて、「これだ！私よりもずっと雄弁、説得力がありますね。」で、その午後、「次回は父親が連れて行きます」と電話のメッセージが残されていた。箱庭で経験されたイメージは、経験を体のレベルと心のレベルの両チャンネルで直に伝えることができるようだ。そしてそれは以心伝心とかライゾム（地下茎）を通して交流され易い。

テーマ1、2に関する事例や経験談を募ります。

事例募集：受講者の中から事例提供者を募集します。

3. ワークショップの受講申し込み

ワークショップの参加予約は、次の要領で申し込んでください。

1. 同封のハガキに必要事項を記入し、往信面・返信面とも切手を貼付し、**2017年4月28日(金)(必着)**までに大会準備委員会へ送付して下さい。また、期日までに参加費の払い込みをお済ませください。
2. 同封の振込取扱票の通信欄に必要事項を記入し、必ず合計金額を記入の上、期日までに諸費用をお振込みください。**振込の際には、必ず参加者ご本人の名義でお手続きください。**なお、振り込まれた諸費用の返金は原則として受け付けませんのでご注意ください。入金確認後、5月中旬に受講コース決定通知（予約受付票兼領収書ハガキ）を送付いたします。別途領収書の発行はいたしません。

ゆうちょ銀行

口座名：00920-0-310345

加入者名：日本箱庭療法学会第31回大会準備委員会

3. ワークショップの受講コースの決定は、受講希望コースに従い、①ワークショップ事例提供者、②会員先着順、③非会員先着順の順位にて決定いたします。同封の往復ハガキに第1希望から第3希望まで明記してお申し込みください。なお、コース決定は、あくまでも第1希望優先です。第2、3希望を書いたために第1希望で不利になることはありません。
4. ワークショップ終了後（12:00）に弁当（1,000円お茶付）を予約販売します。予約する場合は、「予約受付票兼領収書」ハガキの該当欄に○をつけ、受講費と合わせてお振込みください。
5. 予約参加者には、発表論文集と名札を送付します。当日は名札を必ず持参し、直接会場に入ってください。受付は必要ありません。

4. ワークショップの事例発表申し込み

1. 希望するワークショップ・コースが事例を募集している場合にのみ申し込みができます。なお、事例発表は原則として会員に限ります。
2. 同封の大会・ワークショップ申込書ハガキの「7. ワークショップ事例発表“申し込む”」に○をつけ、**2017年4月28日(金)(必着)**までに大会準備委員会へ送付してください。折り返し、準備委員会より連絡いたします。
3. 事例発表の申し込みが多数あった場合は、講師と相談のうえ選択しますので、ご了承ください。

5. 研修証明について

ワークショップ、シンポジウムの両方に参加した方には、臨床心理士教育・研修規定別項第2条(3)「本協会が認める関連学会での諸活動への参加」受講の2ポイントが、ワークショップでの事例発表者には4ポイントが付与されます。名札が研修証明書の代わりになりますので、大切に保管し、ご自身で申請していただくようお願いいたします。

一般社団法人日本箱庭療法学会第31回大会 ワークショップに関する問い合わせ・連絡先

E-mail: congress@sandplay.jp

FAX: 06-6233-8529

郵便: 〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6 (有)新元社内
一般社団法人日本箱庭療法学会第31回大会準備委員会

*お問い合わせやご連絡はなるべくEメールにてお願いいたします。

*お電話でのお問い合わせには応じられませんので、ご了承ください。